

ゼミとその後 85年度生 戸塚(旧姓・手塚) 貴子

巖谷教授のゼミに参加することは、実際にお会いするずっと前から、私のなかでは勝手に決定していたことでした。高校時代からシュルレアリスムとその周辺の芸術に興味をもちはじめ、読みだしたさまざまな本のそこそこに、気がつけばいつもかならず記されている厳めしい雰囲気の名前がありました。それが「巖谷國土」です。著者の略歴欄を覗くと、フランス文学者、評論家、紀行作家、写真家のつぎに、明治学院大学教授とある。ときには名前と正反対の印象をあたえるお顔の写真も。それで、私の行く大学は決まりました。

予定どおりに加わった当時の4年ゼミのテーマは、いろいろなテキストの講読に映画・ビデオ鑑賞をまじえた、独特のラディカルなシュルレアリスム文学・芸術論でした。私にとってはとくに映画史関係の研究が興味ぶかく、いまでも多くのめずらしい映画の残像が頭のなかを巡っているほどです。

期待以上の発見と収穫があった一年間のゼミのおわりに、さらに大きな感動がありました。それはゼミの延長として有志で出かけた外国旅行で、先生がつくった旅程はモロッコ各地を歩いてから、バルセロナにとび、さらにヴェネツィア、ウィーン、プラハを経てパリに到達するという魅惑的なものでした。私は先生とともにこの旅行をすることで、「町」とのつきあいかたをはじめて知ったのだと思います。行く先々で先生の口からたくさんのヒントが紡ぎだされ、私たちはそれを手がかりにして個々でいろいろな体験をする。その場所が大学でなくとも、ゼミとは本来こういうものなのだと感じていました。

そうやって先生の旅の仕方を真似しながら、アンテナを全開にして訪れた町のなかでも、プラハは恐るべき力で私をとらえました。卒業後、個人的にいくつかの旅の経験を重ねた現在でも、あのはじめてカレル橋に立った瞬間にひろがった、ヴルタヴァ川の流れるプラハの夕景が、私のなかでは「旅」の原風景でありつづけているのです。

いわゆるステレオタイプのな大学教授を想像していると、巖谷先生には良い意味で裏切られてしまいます。先生は、教壇の上からひとくりにした「学生たち」を見おろすといった感じがすこしもなく、名乗りでたひとりひとりを大人として認めてつきあい、何かを一緒におもしろがってくれるといったふうでした。大小色とりどりの膨大な数の引き出しをもっておられて、こちらにちゃんとした心づもりさえあれば、澁みない語り口でたくさんのおまけまでつけて、いくらでもそれを開いて見せてくださるのです。そして、そうしつつ先生も楽しんでいる。そんなふうな対先生、また対仲間の個人同士の関係で成り立っていた一年間のゼミは、たまたま「教授」という肩書きのついた博識な夢先案内人を中心にした大人のあつまりであった……ともいえそうです。

本当に、予測できない驚きが曲り角ごとに隠されているようなワクワクした雰囲気は、日本の大学の普通のゼミとは、大きく趣を異にするものだと思います。おもしろいもの、きれいなもの、知っておくべきもの、そうでないもの……そうした自分なりの判断や美意識に、先生との出逢いを通じて確

信がもてるようになったのは幸いでした。

卒業後、縁あってパリに本社のあるアクセサリー・ブランドに職を得、日本へのブティック出店初期から店長、その後に新設された広報部門のプレス・チーフとして最近まで働いてきました。フランスには高級宝飾品とはまた別に《bijoux fantaisies》というくりの装飾品が古くからあります。芸術の一部門としての歴史も独自にあるものです。そのため商品説明などによく使われるフランスやヨーロッパの文化に関連した表現や、ちょっとしたモチーフや色づかいから察することのできるデザインの背景など、ゼミで得た世界の文学・芸術についての知識とセンスは大いに役立ちました。

その間に結婚したこともあって多忙な数年間でしたが、映画会などのあるたびに声をかけていただき、先生や旧ゼミの仲間と会う機会もあります。とうに卒業した大学に理由を見つけては顔を出す気になるというのも、先生のごくりだす「場」の魔法のせいかもしれません。

さらにめずらしいことには、退職して毎週水曜日午後一時すぎ、私がどこに出没しているかといえは……なんと、ほかでもない、巖谷教授の4年ゼミにふたたび参加しているのです。例年以上に頼もしい、明るく熱心な顔ぶれのそろった4年生に囲まれて楽しそうな先生が、つぎつぎと参加者から引きだしてゆく発言や意見によって、ゼミはますます活発な様相を呈しています。刺激的な発見にみちたこの時間に久しぶりに入りこむことで私は、毎週のゼミも「旅」と同質の経験をもちうる時間のできるのだと、嘘のような本当のことを改めて感じているのです。

1997 年 1 月